

平成29年度FDシンポジウム

教育学研究科教科教育専攻「教科指導力高度化演習」公開報告会へ参加して

家政教育講座・竹下浩子

1. 報告会の概要

平成30年1月23日（火）午前8:30から10:00まで教育学部本館4階402講義室にて、教育学研究科教科教育専攻「教科指導力高度化演習」公開報告会が開催された。この報告会は教育学研究科教科教育専攻の大学院生が実際の教育現場をフィールドに研究した内容について報告するもので、テーマは「大学院教育における教科指導力育成の取り組みの方法とその成果について学ぶ」であった。第1回目の1月23日は、国語教育領域、社会科教育領域、美術教育領域の3人の大学院生がパワーポイントを用いて発表を行い、発表後にそれに関する質疑応答がおこなわれた（一領域あたり質疑応答を含め25分）。また、最後に橋越清一さんから全体の講評をいただいた。なお、2回目は翌週の1月30日（火）に行われ、理科教育領域、保健体育領域、音楽教育領域の大学院生が発表を行ったが、都合が悪く参加できなかった。

2. 報告を聞いての感想

いずれの発表も研究と教育の両方がしっかりなされたバランスのとれた授業実践が行われていると感じた。多くの教育現場では、教材研究や授業開発、授業評価などは、どうしても目の前にいる学習者の実態を一番に考え、限られた時間の中で効率よく教えることに目を向けてしまいがちになるが、3つの発表は、教材研究のもととなる先行研究や教材（素材）選びの研究もし

っかりと取り組まれていた。大学及び大学院において習得した専門的知識を十分に活かして、教科指導力の高度化が図れば、学習者の深い学びにつながると思う。また、今回の報告では、評価方法や学習者の感想の分析の考察が大変参考になった。授業の前後の意識の比較は、すぐに成果として現われる学習者もいれば、そうでもない学習者もいる中で容易なことではない。しかし、授業の目標と学習活動との整合性を授業者自身がしっかり組み立てていれば授業直後に行った評価についても正しく分析できると感じた。

3. 家庭科教育への反映

家庭科教育は、生活を教材として取り扱うため、誰も（特に女性）が、教えられる科目という考えが教育現場では今なおある。実際に中・高家庭科教員の採用枠は広がらず、中学校では専科外教員が家庭科を教えている場合が多い。しかし、生活を教材としているからこそ、普段の生活では意識できないことや、意識していても行動に移せないことを学習者がやってみることが必要である。そのためには、高度な生活に関する知識や技術とともに、家庭科においては生活体験の深さも授業者自身に求められる。普段の生活の中で生活者として見たり、聞いたり、感じたりたことを、教材として大事にし、自分の授業に常に活用しようとする高い意識を持った学生を今後育てていきたい。